

第2章 スターリン時代におけるソビエト化と一般国民の生活



1920年代後半から1950年代にかけては、ウズベキスタンをはじめとする旧ソ連諸国の歴史においてもっとも矛盾が多い時期の一つである。一方で、第1章に述べたように、様々な政策が実行され、特に農業集団と工業化が注目された。農業セクターでは集団化と農場結成が行われると同時に、積極的な工業化が行われた。いずれの過程も成功はそれに対する人々の姿勢や考え方にかかっており、これまでの宗教・伝統的な社会で教育を受ける機会がなかった人々の教育や訓練も重視された。このような教育・訓練は第三の政策、現地民化（コレニザーツィヤ）を通して行われた。これらの三つの政策は1920年代から1950年代までの象徴的な政策であり、人々が生きた政治環境と経済状況、その生活に大きな影響を及ぼした。

1. ウズベキスタンにおけるスターリン時代とは

1.1 政治環境

確かに、ソビエト政権はウズベキスタンの現代化を達成するために努力した。ソビエト政権による現代化は農業の集団化、工業化そしてコレニザーツィヤを意味していた。しかし、その一方で、ソビエト政権は集団の利益を優先して個人の権利を犠牲にすることも辞さなかった。こうした意味では、革命は多くの人を自由にする運動ではなく、それまで存在した植民地支配を新しい共産主義者による支配に変えただけという印象を与えてしまった。それが意識的に行われた場合もあれば、無意識的に行われた時もあった。

ソビエト政権は自らがとった政策を人民による人民のためのものだと宣伝し、その政策に反対する者は国民の意思に反対する者として批判した。それは反対

派に「人民の敵」(vrag naroda) という容疑をかける契機となり、次第にスターリンのもとで行われた弾圧につながっていった¹⁾。

1.2 スターリン像

ウズベキスタンにおけるスターリン時代には複数の特徴がある。具体的には工業化、これまでになかった経済成長、教育や科学・研究分野の発展と一般国民の間に広まった識字教育の徹底、そして第二次世界大戦での勝利、ソ連の国際的な地位の確立などが挙げられる。その直接的な結果として、一般国民の生活も少しずつではあるが向上した。

しかし、これらを達成するために多くの過誤も起こり、大きな犠牲が払われたことも事実である。その象徴的な事例はスターリンの独裁政治、反対派に対する厳しい弾圧、間違った民族政策に基づいた複数の民族の移住政策、過激で国民の意向に反した集団化政策とその被害などがある²⁾。

これらの政策に関して議論は多く、いまだに人々の間では意見が分かれる。以下の証言にもあるように、スターリンの政策で被害にあったクリミア・タタール人、ユダヤ人やソ連内に在住していたドイツ人など、強制的に移住させられ、強制労働を強いられた人々はスターリン時代について当然、批判的である³⁾。それは民族政策のみならず、その政策を策定し、実行した政権全体に対する不信を表すものである⁴⁾。

私はスターリンが嫌いだ。戦争を勝ち取った意味では確かに偉大な人物

1) ウズベキスタンにおけるこのような政策の影響については、Shamsutdinov R.T., *Ozbekistonda sovetlarning quloqlashtirish siyosati va uning fozhiali oqibatlari*, Toshkent : Sharq, 2001 ; Shamsutdinov R.T., *Qishloq fozhiyasi : zhamoalashtirish, quloqlashtirish, surgun*, Toshkent : Sharq, 2003 ; Shamsutdinov R.T., Karimov N.F., Yusupov E. Yu, *Repressiia*, Tashkent : Shark, 2005 参照。

2) この時代の様々な民族の強制的移住などとその政策の詳細については、Sheila Fitzpatrick, *Everyday Stalinism, Ordinary Life in Extraordinary Times: Soviet Russia in the 1930s*, New York : Oxford University Press, 1999 と Sheila Fitzpatrick, *Stalin's Peasants: Resistance and Survival in the Russian Village after Collectivization*, New York : Oxford University Press, 1994 参照。

3) この時代の様々な民族の強制的移住などとその政策の詳細については、Terry Martin, "The Origins of Soviet Ethnic Cleansing", *The Journal of Modern History*, Vol. 70, No. 4 (Dec. 1998), 813-861 頁などがある。

4) 例えば、その政策と朝鮮系民族に関しては、Michael Gelb, "An Early Soviet Ethnic Deportation: The Far-Eastern Koreans", *Russian Review*, Vol. 54, No. 3 (Jul. 1995), 389-412 頁参照。



タシケントの中心部にあったスターリンの記念像。スターリン死亡の際には、嘆き悲しむ人々の多くがここに集まった。【スターリンの死亡を惜しむ人々、1953年、タシケント】

なのかもしれないが、だからといって一つの民族（クリミア・タタール人）を肅清する権利はない。

彼はわれわれタタール人をクリミアから追い出した。スターリンがいなければ戦争に勝てなかったとよく言われているが、私は、もしドイツ人が戦争に勝ってわれわれの国を占領していたら、場合によっては今よりも生活はよくなっていたかもしれないと思う時もある。（証言者No. 26, タタール人, 女性, ナマンガン）

一方で、その意見に反論する人も少なくない。ある人の言葉はそのような見解の亀裂を明確に表している。

今になってスターリンをああだ、こうだと言う人は増えているが、スターリンは貧しい国を建て直した。私は彼を国のリーダーとして尊敬している。彼を悪く言う人もいるが、そういう人はろくに仕事もせず、何も達成したことがないから文句ばかり言うのだ。（証言者No. 1, ウズベク人, 男性,

タシケント)

このように正面からぶつかり合う意見がある中で、多くはスターリン時代に関して、中間的な姿勢をみせる。たとえこの時代に起きた弾圧や間違った民族政策に関して批判が多くても、その批判はスターリン自身というより彼の周りにいた人物、例えばNKVD（内務省と秘密警察の機能を兼ねる機関）のトップだったベリアなどに向けられ、スターリンはむしろこれらの人物が犯した誤りの被害者であるという意見もよく聞かれる。そのことからスターリンというリーダーに対する一般国民の姿勢は複雑であり、国家政策を批判してもスターリン個人の批判はあまりみられない。ソビエト政権はプロパガンダの一環として、スターリンを「諸民族の父」とするイメージを広げたせいも、スターリンが亡くなってから長い年月が経った現在でも、一般国民の間にそのイメージは定着しており、スターリンを尊敬する人は少なくない⁵⁾。

中学生だった私にとって、スターリンの存在はとても大きかった。彼について今でも二つのことが言える。一つは自分に対しても他人に対しても非常に厳しい人だったこと。もう一つは、スターリンがいなければ戦争での勝利はなかったということだ。彼が亡くなった時、やはり皆が泣いて彼の死を悔やんでいたのを覚えている。（証言者No. 37, ウズベク人, 女性, タシケント)

1.3 国家政策と国民の関係

スターリンの戦争中の活躍や、スターリンのもとで構築された国家、社会体制は、その時代を生きた人々の記憶に様々な形で残った。そこには反体制に対する弾圧、政治犯の増加や民族政策への恐れもあることを忘れてはならない。

この時代に国家政策と国民が直面していた課題は、ある程度合致していた。政

5) ウズベキスタン国内ではスターリンに関する世論調査が行われていないため、一般国民の姿勢を量的には計りにくい。スターリンの評価に関して、ロシアの世論調査によると、5割以上の方がスターリンを高評価すると答えている。ウズベキスタンにおいて、スターリンの様々な政策に関して意見が分かれても、ロシアと同様スターリンを評価する人が多い。ロシアの世論調査に関しては、Simon Shuster, "Rehabilitating Joseph Stalin", *Time*, 2009年12月22日, (<http://www.time.com/time/world/article/0,8599,1949500,00.html>, 情報取得日: 2010年3月27日) 参照。



責任感の強い労働者は、国民の代表として様々な会議に参加した。彼らは他の労働者の模範となる者として称えられていた。【コルホーズ農場の農民会議の参加者であるタフタビビ・アマノフとタジホン・アスカロフと他の参加者、1937年、タシケント、ガゼエフ撮影】

府は、特に1930年代から工業化と経済セクターの多様化を試み始めた⁶⁾。しかし、その過程で生産される商品は、農業セクターにあった需要に対して十分な供給を確保することができずにいた。工業化を困難にしたのは、ソ連が海外からのローンや直接投資を期待できなかったためで、国内の資金と輸出からの収入に頼らざるを得なかったことである。そのような資金力や労働力の制限の中、政府は労働者に規律と高いレベルの「社会主義的な認識と責任感」を求めた。こうした政府の引き締めは1930年代から戦争中の1940年代にかけて特に厳しく、出勤の実態や労働の質のチェックが徹底的に行われていた。

タシケントの元工場勤務の人物はこの時期の工場への出勤状況について、次のように語っている。

あの時代は厳しかったけれど良い時代でもあった。皆責任感を持って仕事をしていた。朝の5時にテクスタイル工場のベルが鳴ると、皆は一斉に仕事に就いたものだ。

しかし、朝早くに、しかも今のようにバスやタクシー、車などはなかつ

6) 詳しくは、Shamsutdinov R.T. *Qishloq foziyysi : zhamoalashtirish, quloqlashtirish, svagan*, Toshkent : Sharq, 2003参照。



新しい生活の象徴の一つであった、タシケントの新市街のトラム。
【1928年、タシケント、ベンソン撮影】

たので、工場まで行くのは本当に大変だった。ただ、朝方の3時頃に1台のトラムが走って回り、それが人々を仕事場まで運んでいた。自分たちが住んでいる地区の近くの停車場まで行き、そこからトラムに乗った。運転士が寝坊してトラムが来ない時は「タシトランス社（トラムを運営する会社）」に連絡をして、その事実を報告していた。そして、トラム運転士は嚴重注意といった処罰を受けた。なぜなら1人の運転士が寝坊して遅れてくると、皆がそれぞれの仕事場に遅刻するから処罰を受けるのだ。つまり1人のせいで皆が迷惑するのである。（証言者No. 4, ウズベク人, 男性, タシケント）

2. 集団化と一般国民

これらの政策は一般国民の生活を直撃し、1920年代から1930年代にかけて生活水準の低下をもたらした。それについては、次の部分でも述べるように、慣れない農業活動や新しく作られた農場内での活動の効率の悪さが影響した。経験と知識の浅い人が農場や工場で働き始め、彼らが生産できる能力は高くなかった。1920年代になると、都市部において食料品は（販売制限の定める）クーポンやカードにより販売された。それでも、食品を購入するためには長い列に並ばなければならなかった。1929年には食品に加えて、産業の生産品にもカー



スターリン時代の工業化政策の一環として、ウズベキスタンには多くの工場が作られた。【スターリン記念タシケント・テキスタイル工場、1950年、タシケント、ボルテル撮影】

ドが導入された。このような状況は工業化や集団化の実行における様々な課題の現れであった。

2.1 受け入れられていた集団化

貧困層の中には、集団化とそれともなう共同労働とソビエト政権の平等な社会建設への試みを前向きに受け止めた人も少なくなかった。彼らは都市部の労働者の労働環境の改善と農村部における発展を呼びかけ、様々な仕事に取り組んでいた。その仕事には男性のみならず女性も関わっていたが、イスラームの教えにより、活躍しにくい環境にいた女性も多かったために、ロシア人や非ウズベク人の割合が高かったと言われる。こんな証言がある。

農民も都市の住民も食べることに困っており、活動家の母は都市からわざわざ農村に行き、農民に栽培する作物の種を配布し、その説明をしていた。

ソビエト政権に反対する勢力（バスマチ）に見つかって追いかければ、捕



【ストレルコフ記念コルホーズの農民はノルマであった農作業を完了した、8月13日】

まりそうになった時に、農民が母をかくまってくれた。母はロシア人であるにもかかわらずウズベク語がとても上手だったので、農民に気に入られ何度も助けてもらったという。（証言者No. 28, ロシア人, 女性, ナマンガン）

しかし、集団化を受け入れた人も集団化の被害にあっていた。以下の例でも明らかのように、集団化を歓迎しアルテリ（農場）に自発的に参加しても、何らかの手違いが生じてバスマチと間違えられ、集団化の犠牲者になってしまうこともあった。

集団化が始まった時期、父は12頭の牛と2頭の馬を持っていた。そして自発的にアルテリ（後のコルホーズ）に入り、その後はずっとそこで働き続けた。

それにもかかわらず、父はソビエト政権から疑われ始めた。そして取調べの対象にされ、その間ブハラ市にあった家に待機させられた。彼はそのような扱いを受けて非常に怒っていた。自分はアルテリのために牛や馬などすべての財産を提供して働いたのに、疑われることは不当だと主張した。それで10日間食べ物をお腹にするのを拒み抵抗したが、結局それが原因で体を壊して、そのまま亡くなってしまった。（証言者No. 1, ウズベク人, 男性,

タシケント)

集団化の中身については、活動家が各地に派遣されるか、もしくは現地の活動家に任されており、彼らの判断により多くのことが決められていた。しかし、彼らも集団化をどのように行えばその効率を高められるかまではよく理解していなかった。集団化の最前線に立った人たちはそれぞれの判断により、脱クラーク化（脱クラーク化に関しては2.2を参照）や集団化の対象になる人を決めていた。

父は20年代に集団化政策の最前線に立ち、お金持ちの人（クラーク）を脱クラーク化していた。以前、「どうやってお金持ちかどうかを区別していたの？」と聞くと、羊を10～15頭、牛を5～6頭飼っている家であれば間違いなくそうだと答えていた。（証言者No. 29, ロシア人, 女性, コーカンド）

ソビエト政権の指導者の中にもソビエト政権の設立当初から誤った行動をした人がいたことを認める証言もあった。特に、形成当初の赤軍はソビエト政権の政策を理解していない者を多く受け入れたため、彼らが各地で行った政策はソビエト政権がめざしたものと逆のものとなり、集団化やソビエト政権の計画に沿ったものではなく、物と家畜の単純な押収にすぎなかったという。しかし、ソビエト政権のやり方を批判した政権内の人の多くは弾圧の対象になったり、ソビエト政権から敵とみなされ、次第に刑務所や労働キャンプに送られたりした。一般の国民の目線では、そのような対応はソビエト政権が目標として宣言したものと実際に実施した政策の間のギャップを強調することになった⁷⁾。

2.2 強制された脱クラーク化と集団化

集団化の過程の中で、国有化・国営化された資産の共同利用が各地の農民の

7) その一例がトゥラル・ルスクロフであり、彼のソビエト政権成立後の赤軍に対する批判に関しては、Abdullaev R.M., Agzamkhodzhaev S.S., Alimov I.A. *Turkistan v nachale XX veka : K istorii istokov natsional'noi nezavisimosti*. Tashkent : Shark, 2000. 特に196頁参照。

社会的な地位や経済基盤を強化すると考えられた。そのことから「普通の住民以上」の生活を送り、資産を持っている人に対し、ソビエト政権は農場への自発的な参加（事実上、資産の自発的な寄付）をよびかけ、それに応じない場合は力づくで集団化を開始した。

その過程は脱クラーク化とよばれていた。「クラーク」はロシア語では「握り拳」を意味している。革命後の集団化の過程の中で、裕福な人たちが革命家や貧しい生活を送っていた国民から「クラーク（握り拳）」とよばれた意味は、多くの物を持っているのに他人に何も渡さないことからきている。「クラーク」とよばれた人の中には、財産の国営化を逃れるためにパン、小麦や金品などを家の庭に埋めた人もいた。そういう人はソビエト政権からみて反国民的であり、ソビエト政権は彼らの財産を強制的に国有化し、強制労働のためにカフカス、シベリアや他の過酷な自然環境にあった労働キャンプに送った⁸⁾。それが「脱クラーク化」である。しかも、そのような扱いはその家族にまで及んだ。

さらに、集団化の対象にならないようなわずかな財産しか持たない人に対しても税金がかけられた⁹⁾。税金が払えなければ財産を放棄するしかなかった。

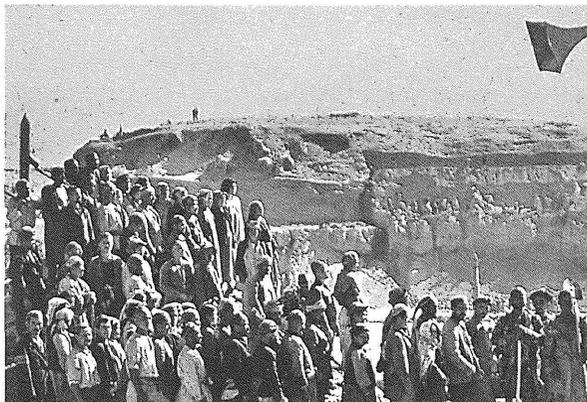
「脱クラーク化」は家にあるものすべてに及んだと言われており、農場の活動に役立つものとそうでないもの間にさほどの差はなかった。ある証言によると、

羊、山羊、牛、ロバなどはすべてコルホーズの財産（国営化）にされた。しかし、それでもまだ足りないかのように、例えば庭に木が植えられていて、果物になるようであればそれにも税金がかけられた。さらに、自分の家で食物から油をとったり、家畜をほふることができる人までが税金の対象になっていた。最後には、家族の頭を1人、2人と数えて、その人数分の税金をとられた。（証言者 No. 45, タジク人、男性、ブハラ州）

同じ人が何回も「脱クラーク化」されたこともあった。1回「脱クラーク化」

8) カスカスに送られた人に関する詳しい研究については、Naim Karimov, *Tarihning hasratli sahifalari*, Toshkent : Sharq, 2006, 126-174頁参照。シベリアに送られた人については、Shamsutdinov R.T., Karimov N.F., Yusupov E. Yu, *Repressiia*, Tashkent : Shark, 2005参照。

9) 詳しくは、Shamsutdinov R.T., *Qishloq foziyasi : zhamaolastirish, quloqlastirish, surgun*, Toshkent : Sharq, 2003参照。



集団化を促進させるため、ソビエト政権は大型灌漑施設の建設を計画し、多くの人々をその建設に動員した。

【フェルガナ大水路建設の際のアナウンス、1939年】

された人が何かを土地の中に埋め込んだり、隠したりしたと疑われると、その人が全財産を失うまで「脱クラーク化」は続けられた¹⁰⁾。

祖父は3回も脱クラーク化された。家中の物を持っていかれる度に祖母を励まし、またすべてを取り戻すことができるとなぐさめていたが、3回目には祖父が逮捕されてしまった。それから私たちと祖母は刑務所まで彼を度々訪ねた。

私は刑務所の大きな金属の門を覚えている。その中に祖母が入ることは許されず、子どもたちだけ入れてもらえた。そこにはとても広い庭があり、祖父がいて、私たちが彼の元へかけ寄ると、抱き上げてくれた。そして別れ際になると必ず、祖父は私のドッピ（帽子）の下にそっとノートを入れた。その中には祖母への手紙がはさまれていた。（証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント）

このような扱いに一般の人々は非常に複雑な感情を抱いていた。これまでに

10) 詳細に関しては、Shamsutdinov R.T., *Ozbekistonda sovetlarning quloqlashtirish siyosati va uning fozhiali oqibatlari*, Toshkent : Sharq, 2001 参照。

も述べたように、集団化に対して多くの人は不満を持っており、反発も多かった。特に長年農業に従事し、ある程度の成功を収めた人々は全財産を国有化されることに当然反対していた。しかも、そのような人たちは「バイ（富裕者）」、「クラーク」と名付けられ、財産がコルホーズの所有になっても彼らをコルホーズのメンバーに入れられないなど、住んでいた地域から追い出されてしまうことも多かった。

また、各地の一般の農民も含め、裕福な生活を送っていた人たちも怒っていた。彼らは各地で暴動を起こしたり、ソビエト政権の代表者にコルホーズを解散させるように訴えたりした。そうなるとコルホーズができた地域の生産力も減ってしまい、その地域の住人が食糧不足によって餓死することもあった。

新しく形成された農場の多くは農場としての経験が浅い上に、これまで作っていた野菜や果物の代わりに綿花を作るように命じられた。当時は次のような歌もあった。「綿花！綿花！綿花！綿花以外になにも称えるな」¹¹⁾。都市部からの住民も綿花集荷に動員され、たまに綿花がわずかしかなかった畑に行かされて、枯れたものまで拾わされることがあった¹²⁾。

その結果、地域の住民がソビエト政権の代表者や活動家と戦い、ある地域ではコルホーズを解散した次の日に、ソビエト政権が軍部隊を送ってコルホーズの解散を無効にしたケースもあった。コルホーズが結成された時に集められた家畜などは、解散と宣言されたコルホーズから、いったん家に連れ戻されたが、翌日にコルホーズに連れて行かれることもよくあった。このような問題は完全な集団化が適用された地域では特に深刻であった。そうした地域では、すべての土地や家畜はコルホーズのものとして扱われ、その地域の大半の人がコルホーズの従業員になっていた。このような柔軟性に欠けた政策は人々の不満をつのらせ、結果として暴動を引き起こすことになったが、そのほとんどは力で抑えつけられた。

また、家畜を集めたものの、その餌の確保ができずに、家畜がコルホーズ内で死ぬこともあり、特に厳しい時期には家畜を各農民に返し、コルホーズが餌

11) ウズベク語では “Pakhta, pakhta, pakhtadan boshqa narsani maqtama”.

12) Bakhtiyor Shakhnazarov. “Uzbeki Turtsii (chast’ III) : Basmachi ili uchastniki natsional’no-osvoboditel’nogo dvizheniia”. *Ferghana.ru*, May 29, 2008. (<http://www.ferghana.ru/article.php?id=5725>) 参照.

を確保できれば再びその家畜をコルホーズに戻した。ある人はそれを次のように語った。

私の家族は、父は工場で働き、母は農民という、ごく一般的な家庭だった。集団化が始まった時、すべての家畜をコルホーズに集め、私たちの手元には何も残らず、生活は非常に苦しくなった。私には10歳年上の姉がいて、母は家事ができないくらい長時間の過酷な労働を強いられていたので、彼女が家のことをすべてしてくれた。

コルホーズは家畜用の餌なんて確保していなかったもので、私たちの家に牛が戻ってきた。それからはわずかながら生活が楽になった。(証言者No. 25, ウズベク人, 女性, ナマンガン)

資産家はこれまで得たものを失うことを恐れ、そのような変化に対して慎重な姿勢をみせていた。最初からソビエト政権の政策を受け入れられなかった人もいれば、途中から賛同できなくなり、政権に反対する立場に変わった人もいた。

その多くはソビエト政権が掲げた目的と、その目的を達成するための手段を支持することができなかったからである。そのような人の中には、家族で土地を所有しながらも、息子たちに分配せず一区画として持っていたために過剰な資産の持ち主にされてしまい、全所有地に目をつけられ集団化された人もいた。さらに、その世帯主のみならず家族全員の身分証明書に、世帯主がソビエト政権に敵対的な考え方を持っているクラークであると明記された。その一例は以下のようなものである。

祖父は革命前に4,000ヘクタールの土地を買い、革命が起こった時はその土地を息子たちに分配せず持っていた。そのため彼はクラークとされてしまった。財産はすべて取り上げられ、路上での生活を余儀なくされた。家族の半分は病気になって死んでしまったが、私の父はどうにか生き残った。

父はその地域から出たので、その後は問題なく生活できたが、父の兄はそこに残ってしまったために、かなり厳しい処置を受けた。彼にはパスポートも発行されず「身分証明書」と書かれた紙には「クラークの息子」、「あら

ゆる権利を取り上げる」と書いてあったようだ。(証言者No. 11, ウズベク人, 女性, タシケント)

それに対し人々は個人レベルで対応し、書類の偽造まで試みた。自分たちが強制された集団化の対象者であることを隠し、その政策の犠牲になることを免れようとした。それは次のようなコミカルな場面まで生み出したが、これは当時の社会状況を如実に反映している。

父の兄はタシケントに来た時、身分証明書に書かれた「あらゆる権利を取り上げる」と同じ色のペンで最後の部分を「ない」と書き換えた。身分証明書の記載は「いかなる権利も取り上げない」になった。

当時の混乱した状況では、それを偽造だと見破る人は誰もいなかったの。彼はタシケントで平凡に暮らすことができた。(証言者No. 11, ウズベク人, 女性, タシケント)

豊かな農民や脱クラーク化された人の多くは自分たちの生活に加えて、住んでいた地域社会も支えており、多くの人から頼りにされていた。確かに彼らの中には、そのような経済力を利用して自分たちの社会的な立場を強化する人もいたが、自分の家族のみならず周りの人の面倒をもみていた人も少なくなかった。そうした人は近隣の人からも支持されていたのである¹³⁾。

2.3 混乱のもとになった集団化

集団化に対する姿勢を決められなかった人も少なくなかった。彼らは集団化に対しどのような姿勢をとったらよいのか、判断するだけの情報を持っていなかった。そもそも集団化が各農民の日常生活にとってどういう意味を持っているのかを理解していなかった。多くの農民は教育を受けておらず、彼らの情報源は同じコミュニティ内に住んでいる近所の人か、モスクの宗教指導者や行政機関の役人から聞いた情報が多く、ソビエト政権が集団化についてまとめた冊子を刊行して

13) Shamsutdinov R.T., Karimov N.F., Yusupov E. Yu, *Repressiia*, Tashkent : Shark, 2005にそのようなエピソードが多く記載されている。

配布しても、それを読める人はきわめて少なかった。さらに、人から人へとあらゆる方向に話が行き、それが一人歩きすることも少なくなかった。

滑稽ながらこんな話がある。集団化の意味を説明するために、ある村で会議が開かれた。住民は集団化される財産とともに妻たちも共有化されるのかと聞いたという。こうしたことから住民の多くは集団化の意義と仕組みについてわかっていなかったことが明らかである。次のような話もある。

私は大人になっていたけれど、まともな教育を受けておらず、自分の周りで何が起きているのかわかっていなかった。ただ毎日畑に出かけて農作業をしていただけだった。(証言者No. 49, タジク人, 女性, ブハラ)

このような情報の理解不足は結果的に混乱を生み、ソビエト政権がどういう目的でその過程を進めているのか、それが誰のために行われているのか誰も正確にはわかっていなかった。それは次の話からも明確である。

集団化は困難を極めていた。私たちは自分たちの土地を勝手に取り上げられて、使われているという印象を受けた。

しばらくして、物事が少しずつ落ち着き始め、皆が何となく状況に慣れてきた。新しい状況を完全に受け入れた人はいなかったと思うけれど、あきらめた人はコルホーズのために働き、家族を養い始めた。(証言者No. 47, ウズベク人, 男性, ブハラ)

2.4 集団化から逃げた人の運命

ソビエト政権に立ち向かった人々はいくつかの名称でよばれていた。もっとも多く使われたのは、バスマチ（ウズベク語で強盗、泥棒）やコルボシ（部隊長）である。彼らは特に集団化に反発していた。なぜなら、彼らの中には裕福な人が多く、集団化の過程で財産、家畜や土地を失った人が多かったからである。その過程に反対した人やそう思われた人、またはソビエト政権に敵意を持っていると思われた人々は強制的にシベリア、ロシアの他の地域やウクライナに送られ、強制労働などをさせられた。

ある証言によると、ウクライナに送られた人々は綿花栽培を命じられたが、ウクライナ的环境や天候は綿花栽培に向いていないためとても苦労したという。なかには綿花栽培に成功した人もいたが、それでも中央アジアと比べて気温が低いと綿花の質には問題があった。ソビエト政権もウクライナでの綿花栽培は困難であると認めざるを得なかった。

ソビエト政権に対する恐怖から、多くの人が逃亡する形で別の国に移り住んだ¹⁴⁾。主な移住先はアフガニスタンだった。アフガニスタンにはウズベク人、トルクメン人が多数住んでいたため、ソビエト政権下の中央アジア地域からアフガニスタンをめざして逃げようとした人は少なくなかった。当時、アフガニスタンに移り住んだ人の証言によると、彼らは現地の人々から「新トルクスタン人」とよばれていたという。アフガニスタン以外にもカシュガルやイランに多くの人が移り住んだ。

当時のデータに、ブハラ・アミール国（現代のウズベキスタン南部とタジキスタン西部地域）の人口は、1917年の1,374,685人から1926年には831,180人まで減少した、とある¹⁵⁾。主な理由として、ソビエト政権下での生活を拒み、アフガニスタンや他国への流出が挙げられる¹⁶⁾。ウズベキスタンのスルハンダリヤ州領内からアム川を渡って、アフガニスタンに移った世帯は4万4,000、人口にして20万6,000人である¹⁶⁾。

財産を放棄した人はアフガニスタンや中国（ムスリムが多く住むカシュガルなど）に逃亡をはかった¹⁷⁾。彼らは国境を自由に行き来できなかったため、彼らの助けになっていたのは仲介業者だった。彼らはロシア人と取引をしたり、ロ

14) アフガニスタンとパキスタンに移り住んだ人の生活については、Shalinsky, Audrey C., *Long Years of Exile: Central Asian Refugees in Afghanistan and Pakistan*, Lanham-New York-London: University Press of America, 1994 参照。中央アジアからトルコへの移住者については、A. Ahat Andican, *Turkestan Struggle Abroad: From Jadidism to Independence*, Sota Press, 2007 参照。ソビエト政権の逃亡者に対する政策については、Panin, S.B., "Sovetskaia emigratsionnaia i reemigratsionnaia politika v Srednei Azii (20-30-e gg. XX v.)," *Vostok (Oriens)*, 2003, 6, 12-20 頁参照。中央アジアからムスリム諸国への移住の概観として、小松久男「中央アジアのムハージル」宮治美江子編『中東・北アフリカのディアスポラ』（叢書グローバル・ディアスポラ3）明石書店, 2010年, 102-125頁。

15) データに関して、詳しくは、Bakhtiiar Shakhnazarov, "Uzbeki Turtsii (chas'III) : Basmachi ili uchastniki natsional' no-osvoboditel' nogo dvizheniia", *Ferghana.ru*, May 29, 2008. (<http://www.ferghana.ru/article.php?id=5725>) 参照。

16) 以上に述べているアフガニスタン以外にサウジアラビアに亡命した人々もいた。その詳細については、Balci, Bayram, "Central Asian Refugees in Saudi Arabia: Religious Evolution and Contribution to the Reislamization of Their Motherland." *Refugee Survey Quarterly*, 26 (2), 2007, 12-21 頁参照。

シア人のために通訳を勤めたりした現地の人であり、国境を違法に越えようとする人を手助けしていた。その代償として、彼らは1人当たりロシア通貨の10ルーブリを受け取っていたという証言もある。興味深いことに、そのような仲介役はソビエト政権やそれに反対するバスマチ運動のメンバーとも取引しており、どちらの味方でもなかった。彼らの主な目的は、ソビエト政権やバスマチ両方から利益を得ることであった。

仲介業者を介してソビエト側の国境警備隊から非公式の許可を得ていても、逃亡を試みた人は自力で国境を渡らなければならなかった。ある証言によると、

私たちは川岸に近付き、川を渡るために牛革から船を作り始めた。そのため、12頭分もの牛の革に口で空気を吹き込んで膨らませた。その作業にはまる1日かかった。

船ができたら女性や子どもと荷物を乗せ、その船を馬の尻尾に結び川を渡らせた。私たちは水に入り、船の端っこを手で持ち川の反対側まで泳いだ。10～15分くらいで対岸にたどり着いた時、国境警備隊に殺されるのではないかという恐怖と寒さで震えが止まらなかった（Abdukhamid Kochar氏の証言）¹⁷⁾。

アフガニスタン側に渡ると、アフガニスタンの国境警備隊に保護されて、町に住むことができた。アフガン政府は彼らをムハージル（移民）として居住地を与えた。逃亡者の証言によると、アフガニスタンの上層部とうまく交渉すれば、移民であってもアフガニスタンのパスポートを手に入れることができ、より生活のしやすいトルコなど他の地域へ移ることも可能だったという¹⁸⁾。

17) ソビエト政権からアフガニスタンに逃亡したブハラ人に関するデータについては、Penati, Beatrice, "The reconquest of East Bukhara: the struggle against the Basmachi as a prelude to Sovietization," *Central Asian Survey*, 26 (4), 2007, 588頁参照。

18) ソビエト政権からアフガニスタンとその後トルコに逃亡したAbdukhamid Kochar氏の証言からの引用。詳しくは、Bakhtiiar Shakhnazarov, "Uzbeki Turtsii (chast' III): Basmachi ili uchastniki natsional'no-osvoboditel' nogo dvizheniia (トルコのウズベク人(第III部):バスマチかそれとも民族解放運動の参加者なのか)", *Ferghana.ru*, May 29, 2008. (<http://www.ferghana.ru/article.php?id=5725>) 参照。

19) アフガニスタンに渡った人たちの政策に関しては、A. Ahat Andican, *Turkestan Struggle Abroad: From Jadidism to Independence*, Sota Press, 2007, 特に151-190頁参照。

ロシアで脱クラーク化にあい、中央アジアのウズベキスタンに逃げたという人から話を聞いた。彼とその家族は、後に生活を建て直すことができたが、長く恐怖に怯えて生活していたという。

農民であった父と母の間には3人の子どもがいて、私はその3人目だ。1930年代に住んでいたバシキリアのある村で、7年生の時に家族が脱クラーク化された。父は逮捕されてモスクワに送られ、私たち家族もシベリアに送られそうになったが、何とか免れて母が一人で私たち3人の兄弟を育てた。

少しして父と他の3人の受刑者はモスクワの刑務所から逃亡し、ウズベキスタンへ逃げることになり、私たちも付いていった。父はまず、ウズベキスタンのコーカンド市に来て現地の工場に就職した。従兄弟がタシケントの出版社に勤めていたこともあり、私たちはタシケントに引っ越した。その後、アンディジャン市のアンサンブルで踊りをしていた親戚がいたので、その人の近くに移り住んだ。

その親戚は私の姉の1人を連れてフルンゼ（現在のビシケク）に引越し、私はそのままアンディジャン市に残り教育者養成学校に入学した。私が学校を卒業すると、アンディジャン市周辺の村にあった学校の校長が来て、私はその村に連れて行かれた。そこで私は国語の先生になった。

家族はアンディジャン市に落ち着き、家やロバ、ロバ車を買った。父はそのロバ車にアンディジャンで買った服などを積み込み、近くの村で別のものに交換して、それをアンディジャン市の市場で売っていた。それが戦時中に父がしていた仕事であり、家族の生活を支えていた。（証言者No. 31, ロシア人, 女性, アンディジャン）

このように、集団化を逃れようとし、ウズベキスタンからアフガニスタンに逃げていく人もいれば、ロシアからウズベキスタンに逃げてくる人もいた。アフガニスタンに逃げた人々は商売などをして生活していた。彼らの多くはアフガニスタンでの生活に満足できず、トルコやイランといった国々に移住して、そこでウズベク人コミュニティを作り暮らしていた。ロシアからウズベキスタンに逃げてきた人々はロシアで脱クラーク化政策によって権利を取り上げられた

ことやクラークとされたことを隠し、新しい身分で生活した。しかし、彼らは日々怯えていた。誰かに身分を知られると再び処罰を受けたり、差別されたり、最悪の場合は弾圧の対象にされる可能性が非常に高かったからである。

3. スターリン時代の弾圧

3.1 弾圧の目的と実態

この時代の弾圧のもう一つの特徴は、ソビエト政権に表立って抵抗したり、反対思想を持っていると疑われた人と、その家族や親戚にまで及んだことだ。

弾圧は国家レベルでソビエト政権の政策として行われた。まずその対象になったのは、政権に反対したり脱クラーク化されたりして、労働キャンプから逃亡して地元に戻り反ソビエト的な活動を続けた人たちである。さらに、脱クラーク化を逃れた人でその財産を隠し、反ソビエト政権活動を行っているか、または支援した人もソビエト政権から不信の目でみられた²⁰⁾。それらに加えて、刑務所に一定の期間入っていた人も潜在的にソビエト政権に恨みを持っている可能性があるとして、弾圧の対象になっていた。ソビエト政権に反対して政治的な活動を行っていた人は犯罪者や泥棒と同じように危険だと扱われ、弾圧の対象とされた。

その対象は二つのグループに分けられた。第一グループはソビエト政権にもっとも敵対的であり、積極的に活動している人である。彼らは逮捕されると短期間にトロイカ（3人の裁判官と検察官）によって裁かれ、処刑された。第二グループには第一グループと比べると更生の可能性が高い人々が入り、労働キャンプに送られた²¹⁾。

刑務所に入る期間は8年から10年と定められていた。各グループには逮捕すべき人数（ノルマのようなもの）が警察庁から通達されていた。それを参考に、警察は様々な活動を通してソビエト政権に敵対的とされた人を探し逮捕していた。

20) このような状況はウズベキスタンのみならずソ連各地でみられた。ロシアにおける集団化と弾圧については、Sheila Fitzpatrick, *Stalin's Peasants: Resistance and Survival in the Russian Village after Collectivization*, New York: Oxford University Press, 1994 参照。

これらの人々の判決はトロイカという、事実上、検察官と同じ判断をする3人の裁判官により下され、その処分はすみやかに執行された。それに対する再審や不服申し立てをすることは許されなかった。トロイカは容疑者の話をほとんど無視し、検察官が取調べの結果として作成した事情聴取記録に頼るという一方的判断の裁判であった。トロイカの権限として、第二グループに入れられた人を第一グループの犯罪者として扱うことも挙げられる。トロイカの審理の結果、判決が求刑より重くなることがあっても軽くなることはなかった。

判決が言い渡された人の名簿が作成されると、それは共産党の執行部に渡された。近年、スターリンが弾圧政策を直接指導し、対象者の名簿に日を通していたことを証明する資料も出てきている²¹⁾。

警察には、まず第一グループと第二グループの対象者を特定するための期間が設けられた。第一グループにあたる者を逮捕して、可能な限り短い時間で全員の身元を判明し、彼らの書類をトロイカに送検することが義務付けられた。その後、監視されていた第二グループにあたる者が逮捕される。そして同じようにトロイカに書類（と身柄）が送られることになっていた。第二グループから労働キャンプに送られる者は、シベリアや他の環境が厳しい地域で労働キャンプ建設のために働くことになる。さらに警察庁には重労働の必要があり、労働者が足りない地域の共産党支部や自治体に呼びかけ、必要があればそのような地域にも第二グループの中から人を送っていた。

逮捕後の取調べに関しても具体的な規定が存在した。容疑者が取調室に入ると、取調べを始める前に政府宛の謝罪文を書かせて、反ソビエト活動を行ってきたこと、それに対する謝罪、警察と協力してその罪を償いたいといった内容を明記させる。

謝罪文が書かれるまでは取調べをせず、書くまで2～3日かかったとしても彼を取調室から部屋に戻さず、寝させないことが定められていた。そのため、取調べは2、3人体制で交替して行われていた。規定では虐待ともとれる取調べ方

21) その詳細に関しては、Shamsutdinov R.T., Karimov N.F., Yusupov E. Yu, *Repressiia*, Tashkent : Shark, 2005, 204-216 頁参照。

22) この証言は他の証言や文書からも裏付けることができる。例えば、Shamsutdinov R.T., Karimov N.F., Yusupov E. Yu, *Repressiia*, Tashkent : Shark, 2005, 204-216 頁参照。

法も指導されており、例えば容疑者を椅子に真っ直ぐに座らせて謝罪文を書くまで姿勢を変えさせないことや、食事を与えないことが盛り込まれている。謝罪文を書き、取調べに前向きに応じるようであれば、食事を与え少し休ませてから続けるように規定されていた。そのような形で取調べの記録を警察官が作り、あらゆる手段を用いて容疑者にサインさせた。

取調べの準備や執行段階では、対象者について細かい情報が収集された。生年月日、職業やこれまでの経歴のみならず、家族の名簿、15歳以上と以下に分けた子どもの名簿、15歳以上の子どもであれば、ソビエト政権への姿勢や考え方についてまで報告された。また、必要とされれば弾圧対象になった人の妻の逮捕にも踏み切った。対象者と離婚していたとしても、ソビエト政権に敵対的で元夫の活動に関係していると判断されると逮捕された。妊娠中や重い病気を患っている妻は逮捕の延期を言い渡され、出産や病気の治療が済むと逮捕された。妻に夫の反ソビエト的な活動を報告させるため、警察と協力した妻に限っては逮捕が免除された²³⁾。

逮捕ともない家宅捜索が行われることになっており、見つかった金品、反ソビエト的な資料、個人情報を含む書類などは押収される。それらに加え、容疑者名義の財産はすべて押収された。例外として年をとった両親には、わずかに必要な住居部分と服が残された。妻や子どもは連行され、妻は刑務所に、子どもは特別施設に入れられた。

ソビエト政権に敵対的な姿勢をみせた未成年者や未成年者犯罪と疑われた子どもは、未成年者用の労働キャンプで働かされた。労働キャンプに送られた人の早期釈放に関しても制限があった。最初はよく働き更生したと判断された元受刑者を釈放し、重要な都市（モスクワ、ミンスク、キエフ、トビリシなど）や国境周辺地帯以外の地域に住まわせることが決められた。しかし、しだいに釈放される受刑者が増えたことから、この政策についてスターリンによる修正が求められた。

23) これらの概要については、Shamsutdinov R.T., Karimov N.F., Yusupov E.Yu. *Repressiia*, Tashkent : shark, 2005. を参照。

スターリンはキャンプでの労働者が減ることを危惧し、解決すべき経済課題が未解決のままに残されてしまうという懸念を示した。そこで、そのような受刑者を書類上釈放しても、キャンプ地に自由労働者として住ませ、引き続きキャンプで働かせることを提案した。そして、スターリンは彼らのやる気を高揚させるために、特に優れた労働者には勲章を贈呈し、キャンプ地で引き続き働いてもらうことなどを提案した。それに加えて、労働キャンプの近くに村などを作り元受刑者の家族を住ませることで、彼らをより長く働かせる環境を作ることを模索した。

3.2 反対者の弾圧と恐怖感

ソ連を構成する民族の中で民族主義者や反ソビエト支持者と疑われた知識人は厳しい弾圧を受けた。彼らの発言や書いた文書の一つでも危険と解釈されれば、処刑にいたることも珍しくなかった。これはソビエト政権がこれまでに進めてきた政策をあらゆる手段を通して成功させるということを国民に知らしめ、逆らう者に対して妥協はしないという姿勢の現れであった²⁴⁾。

20年代後半からコルホーズ化が始まり、1頭の馬があれば、中産階級の農民としてみられた。最初の頃はコルホーズ化政策に対して反発した人もいたが、その後ソビエト政権はそうした中心人物を肅清する政策を開始した。特に、ウズベク国民の知識人が被害を受けた。例えば、アブドッラ・カーディリー、フィットラト、ファイズラ・ホジャエフなどである。

例えば、アブドッラ・カーディリーは『オビド・ケトモン』という著書の中で、何らかの(政治的な)「ミス」を犯し、それがもとで消された。私の父は(作家の)チョルパンと刑務所で同じ部屋に入れられ、しばらくの間一緒にいた。数ヶ月後に父は無事釈放されたけれど、チョルパンは処刑されてしまった。(証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

知識人以外にも弾圧の対象になった人はいた。外国に留学した経験がある人

24) 例えば、集団化に逆らう人が弾圧され、強制労働に送られた一例については、Naim Karimov, *Tarihning hasratli sahifalari*. Toshkent : Sharq, 2006. 126-174 頁参照。

もスパイと疑われて厳しい取調べを受けた後、処刑されることが多かった。

エンジニアだった父は国費留学生としてドイツ留学から戻ってきた。大学の会議でドイツの機械や技術力がいかにすばらしいか讃えるように話してしまった。そうしたら、大学からだけでなく、秘密警察からも疑われるようになった。ドイツとの関係が日増しに悪化するにつれ、父に対する疑いは深まり、とうとう逮捕されてしまった。

刑務所では技術関連の仕事をして、一定の期間が過ぎると釈放されたが、父の兄は戻ってこなかったという。そして、もう一人の親戚も父と同時に逮捕され、行方不明のままである²⁵⁾。(証言者No. 12, ウズベク人, 女性, タシケント)

このように、ソビエト政権にとって脅威とみなされた人物や民族に対して繰り返し弾圧が行われた²⁶⁾。確たる証拠のない人までが、この時期多数姿を消し、いまだに理由はわからないままである。

私は12か13歳だった。両親が働いていた工場にはとても優しく働きの工場長がいたと聞いている。

彼は労働環境だけでなく私たちの住まいにまで気を配ってくれていた。ある日、彼の姿が忽然と消えた。彼がどこに行ったのか誰もわからなかった。探そうとした人もいたが、上(国家機関もしくは秘密警察と思われるところ)から彼を探さないように言われた。彼に何があったのかは今もわからないままで。(証言者No. 33, タタール人, 女性, アンディジャン)

このような厳しい弾圧の中でも、人々はあらゆる手段を講じて対応しようとしていた。例えば、身内の者が逮捕され刑務所に入れられた場合でも、親戚が

25) この証言は他の証言や書類からも裏付けることができる。例えば、Shamsutdinov R.T., Karimov N.F., Yusupov E. Yu. *Repressiya*, Tashkent: Shark, 2005. 78-79, 84-85頁参照。

26) 弾圧にあった人の名前と弾圧の実体を描いたものとしては、Shamsutdinov R.T., *Istiqol yolida shahid ketganlar*, Toshkent: Sharq, 2001がある。

刑務所の関係者と交渉し、一時的に家に帰すことができたという証言もある。

祖父が逮捕されると、私の父親は刑務所の人に祖父を夜中1～2時間でも家に帰すよう個人的に交渉して、了解を得ることができた。

祖父が帰って来ると、食事をして少しの間家族と話をし、明け方近くになると待っていた監視人とともに刑務所に帰る。そんなことが毎日続いた。(証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド)

現在、スターリン時代の弾圧に対する批判が多く聞かれるが、その責任は誰にあるのか国民の間でいまだに多くの議論がある。スターリンの指導のもとに行われたことではあるが、彼は実態をよく把握しておらず、弾圧を命令し実行したのは彼の部下で秘密警察長官のベリアだと言う人も少なくない。

ある意味、スターリンも犠牲者の一人だと考える人は、弾圧の被害にあったグループの中にもいる。

父親の兄は1939年から1942年まで刑務所に入っていて、釈放されてから今もなお「私を刑務所に入れたのは誰なのか、そんなことはわからないけれどスターリンでないことだけは確かだ」と言い張ってきた。そして、いつもスターリンのことを尊敬を込めて話していた。(証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント)

このような話は、やはりスターリンに対するイメージと弾圧という行為の間に矛盾があったことに起因する。多くの人は指導者であるスターリンを信じており、たとえ彼が弾圧を命じたとしても、それを実行に移したベリアの方により責任があると考え、それにはいくつかの理由があり、その一つはソ連時代のプロパガンダである。もともとスターリンには資産もほとんどなく、服は一着しかなかったといわれ、一般国民と同等の生活を送り、痛みや苦しみを分かち合っていたとされる。

よく知られている例として、スターリンの息子が第二次世界大戦中にドイツ軍に捕まり、スターリンのもとにソ連軍に捕われていたドイツ軍の司令官との

交換話が持ち込まれた。その際、スターリンは自分の息子をただの一兵士として扱い、ソ連軍は兵士と司令官は交換しないと明言した。これはスターリンの自己犠牲の例として高く評価され、ソビエト政府のプロパガンダの一環としてもよく使われた。他にも、第二次世界大戦での大勝利や国の再建をスターリンのおかげとみる人も少なくない。そうしたことから、スターリンと弾圧を結び付けたくない人が数多くいるのである。

3.3 民族の強制移住

この時代は民族集団も大きな被害を受けた。ソ連の朝鮮人、ドイツ人、クリミア・タタール人やユダヤ人などはスターリンの民族政策により、ソ連の国境周辺や戦略的に重要な地域に住み、ソビエト政権に対する忠誠心が弱いとの理由で居住地からシベリアや中央アジアに強制的に移住させられた²⁷⁾。彼らは1940年代前半には列車などで中央アジアに移動させられ、その途中で多くの人が亡くなった。彼らが送られた場所は環境が悪く、自分たちで家を建てたり、荒れた畑を耕したりして生活する環境を整えなければならなかった。

移住させられた人の証言によると、生活環境はよくなかったが、地元の住民が助けてくれたという。

私の母は1944年5月頃にクリミアからウズベキスタンに送られた。母には9人の兄弟姉妹がいたが、風邪を引いたり、食べるものがなくなったりしたために移動中に亡くなった。到着した時には、私の母と両親だけになっていた。

母と両親はキターブという地域のパラング村に住まわされたが、村から一歩も出ることを許されていなかった。移住後、両親はすぐに亡くなり、母は一人になってしまった。彼女の最初の仕事は木を倒すことで、しばらくして農場に就職した。

当時はウズベク人の生活も決して豊かではなく、一房のブドウを分けて

27) この政策を朝鮮系の事例で解説した論文としては、Michael Gelb, "An Early Soviet Ethnic Deportation: The Far-Eastern Koreans," *Russian Review*, Vol. 54, No. 3 (Jul. 1995), 389-412頁参照。

食べた時期もあったが、ウズベク人の多くが身の回りのことを手伝ってくれて、友好的であったことを肌で感じたという。

母は学校で7年も勉強したので教育を受けた人として扱われ、彼女は孤児院に就職し直し、そこで教師をしていた。(クリミア・タタール人の)父もきちんと教育を受けた人だったので教師として学校で働いた。母と父が就職してからは苦しい生活から脱け出すことができた。私は母が勤める学校を卒業して、医学専門学校に進み、兄もタシケント工科大学を卒業することができた。

あの頃の私たちの願いは「一日一日を生き延びる」ことだった。「今日も何とか無事に終わった」と毎日夜になると思っていた。(証言者No. 18, タタール人, 女性, タシケント)

このような証言から、移住させられた人とその地域にすでに定住していた人との間の対立が、ウズベキスタンではあまりみられなかったことがわかる²⁸⁾。その理由としていくつかのことが考えられるが、とりわけ中央アジア的な価値観や、困っている人に手助けをすることを推奨するイスラーム教の教え、文化などが影響したとみられる。

さらに、別の人の証言も強制移住当時の苦しみを物語っている。

私の友人にクリミア・タタール人がいた。彼は小さい頃にウズベキスタンに連れて来られた。彼の話によると、ある場所まで列車で運ばれて、何も無いステップ地帯で降りるように命じられ、砂漠のど真ん中に残されたという。誰かの助けがないと確実に死ぬ運命だった。

幸いにも遠くに村があり、その村の長老たちが彼らを見つけて、代表者を寄こしてくれた。どのような民族で何をしに来たのかを聞いてきたという。ウズベク人の村だったために、タタール人とは言葉が通じたこともあり、長老は同じムスリムである彼らを快く自分たちの村に受け入れたとい

28) ロシアにおける強制移住政策の対象となった人と移住先に定住していた人との間の対立などの一例は、Terry Martin, "The Origins of Soviet Ethnic Cleansing", *The Journal of Modern History*, Vol. 70, No. 4 (Dec., 1998), 813-861頁, 特に828頁にある。

う。二つの民族が共存しはじめたおかげで、その後も多くのタタール人が死から逃れることができた。(証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント)

このようにソビエト政権は信頼できない民族集団を特定し、国境周辺や戦略的に重要とされる地域から、生活環境が厳しく労働者不足の地域に送り込んだ²⁹⁾。彼らは新しい地域では農場や様々な地方機関で働いた。移住政策の対象とならなかった人も、国家に対して忠誠心を疑われる行為をすると次の証言のように移住させられた。

私たちはクリミア・タタール人だ。父の家族全員がクリミアで生まれ育った。私はウズベキスタンで生まれたが、私たちがウズベキスタンに移り住んだ理由は父が軍人時代に失態を犯したからだ。そのため、ウズベキスタンのザンギオタ郡に監視人として送られたのである。

彼は1936年にザンギオタからロシア人が1880年代に建設したセルデョンカ村に移動になり、そこはベガバードから15キロの距離にあった。53年によく父への刑罰は不当なものだとされ、父の名誉は回復されたが、父はそのままウズベキスタンに住み続けた。彼はコルホーズなどで働き、トラクターや他の機械の整備士になった。

私たちが大人になると姉の1人は、タシケントに戦争中に移されたレニングラード航空大学に入学し、戦後そこを卒業した。彼女はその後、ロシアで勤めて、今は80歳だ。2人の姉はサマルカンド大学の歴史学科を卒業してクリミアに戻り、そこで生活している。そして、私はそのままウズベキスタンに残った。こうして私の家族はロシアにもウクライナにもウズベキスタンにも住んでいるので、離ればなれになってしまったが、それがわれわれの運命だと思っている。(証言者No. 5, タタール人, 男性, タシケント)

29) 例えば、1944年だけでウズベキスタン国内に151,424人のクリミア・タタール人が送られてきたと記録されており、当時の民族強制移住政策の規模を物語っている。データに関しては、Alimova D.A. ed., *Mustabid tuzumning Ozbekiston millij boitliklarini talash siyosati : Tarix shohidligi va saboqlari*. Toshkent : Sharq, 2000, 特に93-95頁参照。

4. スターリン時代と社会の現状

スターリンのリーダーシップは政治や経済（農業と工業）の分野において発揮されていく。それが農業の集団化や反対勢力への弾圧という国民を苦しめる結果をまねいたが、その反面、工業化のような見るべき成果をあげたこともあった。いずれも人々の生活に多大な影響を与え、それは彼らの考え方や人生に対する姿勢にまで及び、人間関係までも変えることとなった。なかでも、スターリン時代の世相を反映するものとして記憶に鮮明なのは、経済的な困難とその困難に負けることなく人々が助けあったこと、そして経済の安定にともなう姿を現した社会の現代化である。

4.1 スターリン時代の経済状況と人々の生活

経済政策の面では、集団化と工業化が進められ、土地や工場の国有化と国営化がその政策の中心となった。当時を覚えている人によると、この時期、生き延びることだけが唯一の目標であり、誰もが日々どのように暮らすかを真剣に考えていた。

祖母は当時、農民チームの一員として畑で働いていた。コシ・コゾン（共同釜）という制度があって、一つの農民チームで1日中働いていた。その間に畑の横のテント（ダラシボン）では共同釜と言われる大きな鍋で食事が作られていた。鍋の中身は、ほんの少しの野菜を油で炒めただけのもので、それに水を混ぜてかさを増やしていた。あまり美味しいものではなかったと聞いている。

1日の仕事を終わると皆がそのテントに集まり、その日の労働賃としてひしゃく1杯分の鍋の料理が配られた。そして、もっとも良く働いた人には鍋の底を舐める権利が与えられた。まずスプーンで残った料理をかき集めてひしゃくに入れ、わずかに底にたまった汁を舐めるというものだった。祖母はひしゃく1杯分は家に持ち帰って子どもたちに食べさせて、自分是一所懸命働き、鍋の底を舐める権利を得て、それで食事を済ましていた。

畑での労働だけでなく、カナル（大型水路）などが作られた時も同じよ

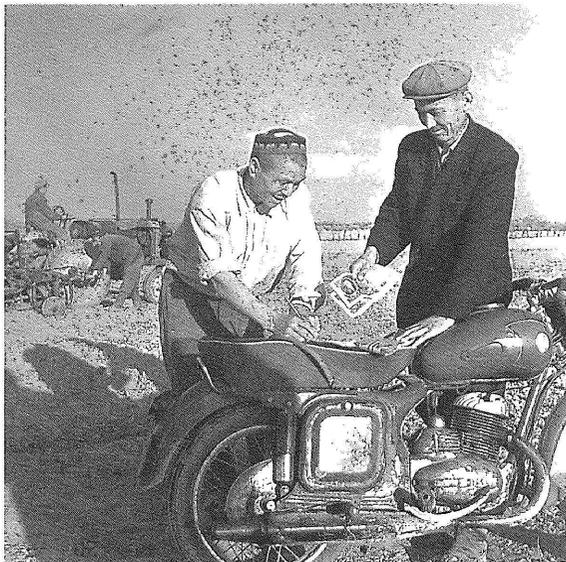


農作業の合間に農業チームが昼食をとる姿。【ボズ郡、ウルクガル記念ソフホーズの昼食風景、1971年、ブハラ州、ウスマノフ撮影】

うな支払い方法だった。当時、トラクターなどはなくすべて手作業だった。そのため、人々はケットマン（土を掘るシャベルのような道具）を使い、何キロも続く水路を作っていた。こうした皆の精一杯の労働がなければ、建設や経済問題の解決は不可能だった。（証言者No. 32, ウズベク人, 男性, アンディジャン）

こうした経済問題は不健全な政治状況によってさらに悪化の一途をたどる。状況が深刻化するなか政治的な弾圧もしきりに行われ、証言のように一般の人々の間に恐怖が広がった。

この時代（初頭）にはとにかく食べる物がなかった。皆はパンを買うお金がなく、何も手に入れられなくて外で餓死する人もいた。とても優れた人が次々に処刑されていき、とにかく怖かった。（証言者No. 37, ウズベク人, 女性, タシケント）



農民の生活水準が上がり始め、給料が定期的に農作業の場で支払われるようになった。【チナズ郡、キーロフ記念コルホーズの会計責任者であるアディロフが、農民のウスマノフに給料を手渡している様子。1959年、スルハントリヤ、キム撮影】

集団化の問題は、農村と都市部における食糧不足を引き起こし、工業化をも困難にした。1935年まで状況は悪化し続けた。1935年からはパンや麺類に関するカード販売が廃止された。さらに、1936年には残りの商品の販売制限が廃止され、配給制度が変わった。その後も食品の販売制限は導入されるが、きっかけとなったのは1941年の第二次世界大戦であった。戦後に食品の配布制度が緩和され、食品の価格が下がり始めると、それが国民の将来に対する自信となり、政府に対する不満を和らげることになった。

両親はスターリンのおかげで生活が日に日に良くなっていったと感じ、尊敬していた。特に母が喜んだのは、毎年3月にある物価の値下げだ。皆それまで物を買わずに我慢して、値下げの時期が来たら色々な物をどっと買い込んでいたという。だんだん生活がよくなっていったので、人々の期待に国家機関は十分応えていたことになる。(証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド)

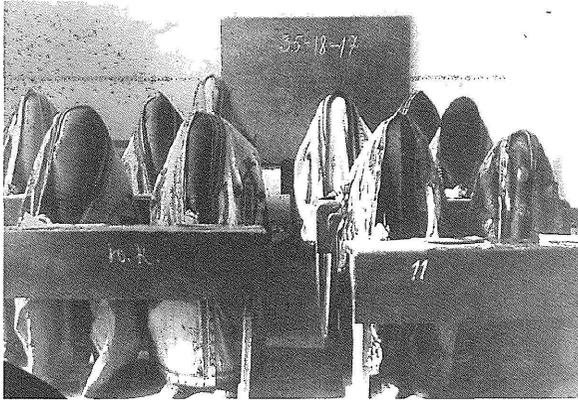


より効率の高い農作業のために作業の機械化が勧められ、農業機械の展示会がしばしば開かれるようになった。【農業機械の展示会，5月，1929年，サマルカンド】

このように賛否両論ある中で、最近になって人々は当時の出来事を冷静な目でみられるようになった。スターリン時代の集団化や弾圧を良くないことと知りつつも、その時代には社会に解決すべき課題が多く、それらを解決するためにスターリンの政策があったと考えるのである。彼らは、政策そのものは失敗だったが、スターリンは決して悪意があってそれを進めていたわけではないと考えている。

私は親から聞いた話しか知らないけれど、当時はお金持ちの人から土地や他の財産を取り上げ、コルホーズに入れていたと聞いている。馬やロバ、家畜までも（お金持ちの人から）取り上げることで初めてコルホーズができた。貧しい人々の生活を支えるためにも、そのような政策がとられたのだと思う。

あの時代の政策にはそれなりの根拠があり、私は批判するつもりはない



女性の社会復帰のために、ソビエト政権は女性教育を促進し、多くの女性に教育の機会を与えた。【ペンソン撮影】

が、まだ生まれていなくて本当に良かったと思っている。（証言者No. 22, ウズベク人, 男性, ナマンガン）

4.2 社会の現代化と人々の動揺

従来、ウズベキスタン社会はイスラーム信仰が強く、そのために異教徒のロシア人に対する姿勢は慎重なものであった。それには帝政ロシアの植民地政策のイメージも関連しており、人々は帝政ロシアの総督やロシアから来た革命家、ロシアで教育を受けたのちウズベキスタンで共産党とともに活動している現地人に対しても、一定の距離をとって接していた。

社会改革や労働者と農民の生活水準の向上をうたった共産党員のスローガンは彼らにとって魅力的だったものの、それにとともなう変化を恐れる人も少なくなかった。例えば、女性の社会進出を支持していても、それがどのような結果をもたらすのか不明なために、慎重な姿勢をみせる人もいた。

政府の指令が発令され、女性がブルカ（女性が外に出た時に顔と体型を隠すための服）を着用しないことが命じられた。しかし、それは許されないことだと反対していた人ももちろんいた。そんな中で、ある日ブルカを脱いだ女性が殺される事件があった。（証言者No. 25, ウズベク人, 男性, ナマンガン）



【ブルカの女性、1934年、アンディジャン、ベンソン撮影】

このように女性の中にも積極的に社会進出を試みた人もいたが、保守的な考え方をするモスク関係者や、反ソビエト集団や女性の社会進出に反対する人の報復を恐れてブルカを捨てず、伝統的な生活を送る女性も少なくなかった。

また、ソビエト政権に反発する理由の一つにロシア語の強要があった。ロシア語を使うことは政権に味方することを意味すると考えられた。

ある証言者によると、子どもが学校で習ってきたロシア語の単語を家で使うと、母親がすぐに口を洗うように命じたという。異教徒もしくは無宗教のロシア人が話す言語は子どもの口を汚すと考えられた。

ソビエト政権は教育の重要性を訴えたが、これまで伝統的なイスラーム教育しか受けてこなかった人はこの言語政策をなかなか受け入れなかった。1920年代にソビエト政権が誕生してからは多くのモスクが閉鎖され、子どもに対する教育はモスクではなく宗教から独立した教育機関・学校で行うようになった。そのため、子どもを学校に行かせることすら拒否する人もいた。

そして、人々を混乱させたのが政治の動向である。ほとんどの人は政治についてまったく理解しておらず、その変化についていけずにいた。ある時期には特定の政策が共産党や政府により重視され宣伝されたが、比較的短い間にそれが正反対のものに変わっていった。政治家や国民的英雄として尊敬されていた活動家たちも次々と弾圧にあい、「人民の敵」にされた。それが、国民のソビエト政権に対する混乱を生み出していた。次の証言は学校におけるそのような

状況を物語っている。

私が小学校4年生の時、歴史の教科書には政治家やウズベク人活動家の写真がたくさんあったが、ある日先生から別の紙（もしくはレーニンなど別の人物の写真）を貼って彼らを隠すように言われた。彼らが人民の敵とされるようになったからだ。紙を貼って隠している子もいた。（証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント）

これらの事例からも、スターリン時代が国民からどれほど熱い支持を受けていたか、また一方で、いかに矛盾の多い時代であったかということが明らかである。

ま と め

スターリンがソ連の主導権を握った時期において、ウズベキスタンの社会内には非常に複雑な状況が生まれた。ソビエト政権は、自分たちの戦いの対象は労働者や農民を搾取してきた裕福な人たちであると強調してきたが、その基準は曖昧であり、最終的にソビエト政権に反対する者全員に対して厳しい姿勢で接していた。ソビエト政権を批判した人は犯罪者として扱われ、個人のみならずその家族までが劣悪な環境のシベリアに強制労働のために送られた。その多くは移送途中で病気や寒さで亡くなり、シベリアでの強制労働から生きて帰った人はそれほど多くない。

革命以前の中央アジアにおいて、統治制度や社会の格差に不満を持っていた人は多く、彼らは革命を歓迎し、自ら共産主義や社会主義の理念を訴えた。彼らの中には共産党員になり、各地を回り、共産主義や社会主義建設の重要性を訴えた人もいた。新しい社会建設は魅力的なスローガンであり、労働者のみならず農民や知識人もそのよびかけに応えた。彼らにとって、それは単に新しい社会構築だけでなく、これまでの植民地状況から脱却し、独自のアイデンティティと社会の発展のための機会でもあった。

しかし、当然のように、それに反対する人も少なくなかった。結果として革

命とその後の共産主義・社会主義建設は社会的な亀裂を生み出し、ウズベキスタンの社会をソビエト政権支持者と共産主義・社会主義を拒否する人に分断してしまった。

このようなスターリン時代におけるウズベキスタン国内の状況は、ソ連時代とソ連時代以降では異なる形で描かれた。ソ連時代の歴史学は、この時期のウズベキスタンをはじめとするソビエト社会は統一されており、国民の圧倒的多数はソビエト政権を支持したと描く。それに対し、ソ連崩壊以降に書かれたウズベキスタンの歴史では、この時期に多くの人がソビエト政権に反対し、戦いを拡大したことを主張する。

しかしながら、以上のことからわかるように、多くの一般国民はそのような状況下において、ソビエト政権が訴えてきた経済発展と一般国民の生活水準の目標を支持しながらも、脱宗教やこの地域の新たな植民地化に反対しており、ソビエト政権と反ソビエト政権の両勢力の主張に、それぞれ親近感を感じていた。この他にも、議論を起こした女性解放運動のような矛盾の多い課題に対しても戸惑いを持っていた。彼らにとって、この時期はそのような希望と失望、そして混乱の時期であったのである。